

埋立地における自然再生と環境緑化を体験する空間のあり方に関する基礎研究

奈良女子大学 生活環境学部 住環境学科
祝 彩夏

1. はじめに

神戸市沿岸には数多くの埋立地があるが、その中に一つ、ほかとは異なる特徴をもつ埋立地がある。臨海部土地造成事業（浚渫土砂受入）六甲アイランド南地区と神戸沖埋立処分場からなる、六甲アイランド南計画対象地区である。この計画によって土地が創出された場合、その対象地区内には浚渫土砂による埋立地と、廃棄物による埋立地という異なる環境条件の埋立地が隣り合って存在することになる。

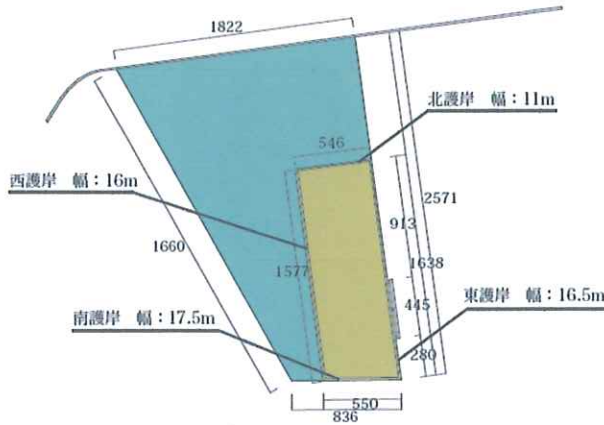
浚渫土砂による埋立地では人為的に緑化を進め、廃棄物による埋立地では緑化を行わず、埋立後の土地をそのまま放置した場合を想定し、そこに発生する自然の違いを体験できるインターフェースの空間モデルを提案する。

2. 対象敷地について

・計画範囲



・敷地概要



単位：m

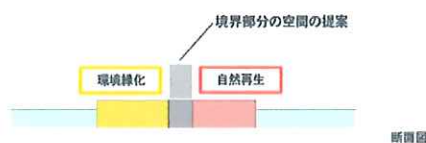
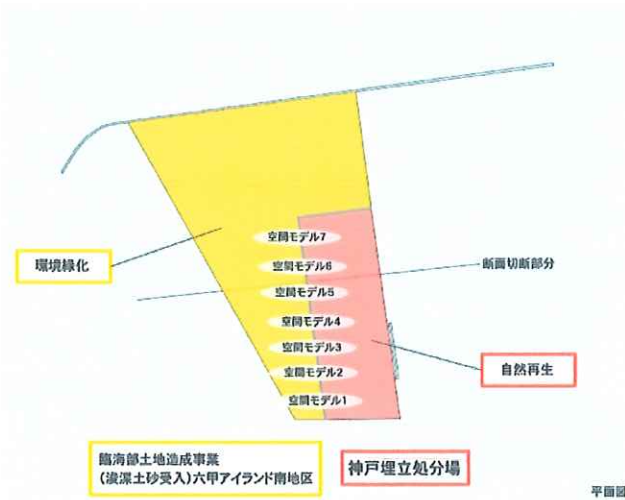
臨海部土地造成事業（浚渫土砂）
六甲アイランド南地区
位置：神戸市東灘区六甲アイランド地先公有水面
面積：2250,000㎡
土量：1,500万㎡
歴史：1997年度 潜堤築造
1998年度 浚渫土砂受入開始

神戸沖埋立処分場
位置：神戸市東灘区向洋町地先（神戸港内）
面積：880,000㎡
種類：管理型処分場
埋立容量：1500万㎡
護岸延長：約4.3km
歴史：1998/2 護岸工事現地着工
2001/12 護岸締切完了、廃棄物受入開始

3. 提案内容

対象敷地には、浚渫土砂による埋立地、廃棄物による埋立地、の2つの異なる環境が存在し、それらのインターフェースとなっているのが神戸沖埋立処分場の4辺の護岸である。

そのうちの西護岸に、2つの埋立地に発生する自然の違いを体験する空間モデルを提案する。西護岸は約1.5kmあり、ほぼ南北にまっすぐのびている。本提案では南から北への一方通行で、様々な空間モデルが順番につながっていて、両者の違いを体験しながら進んでいくものとする。

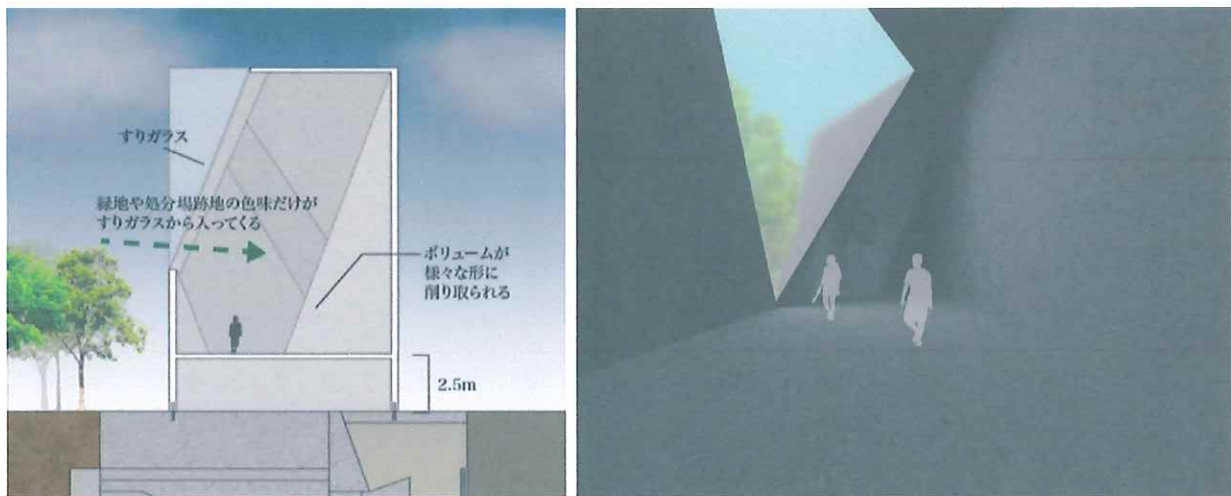


空間モデル 1



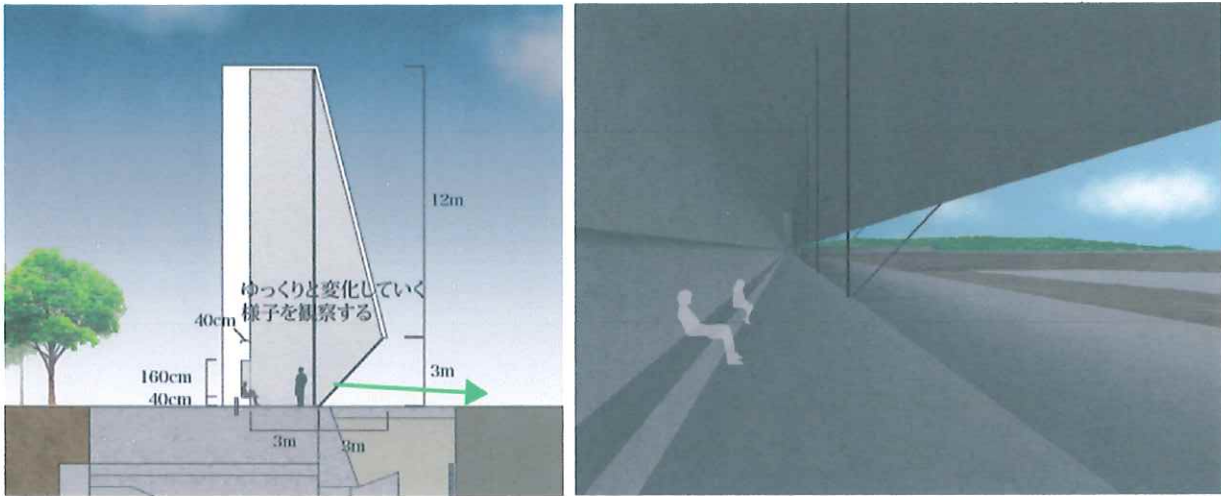
地上 2m、幅 3m の通路。足元はグレーチングになっていて、両側からそれぞれ異なる植生が入り込んでくる様子を見ることができる。

空間モデル 2



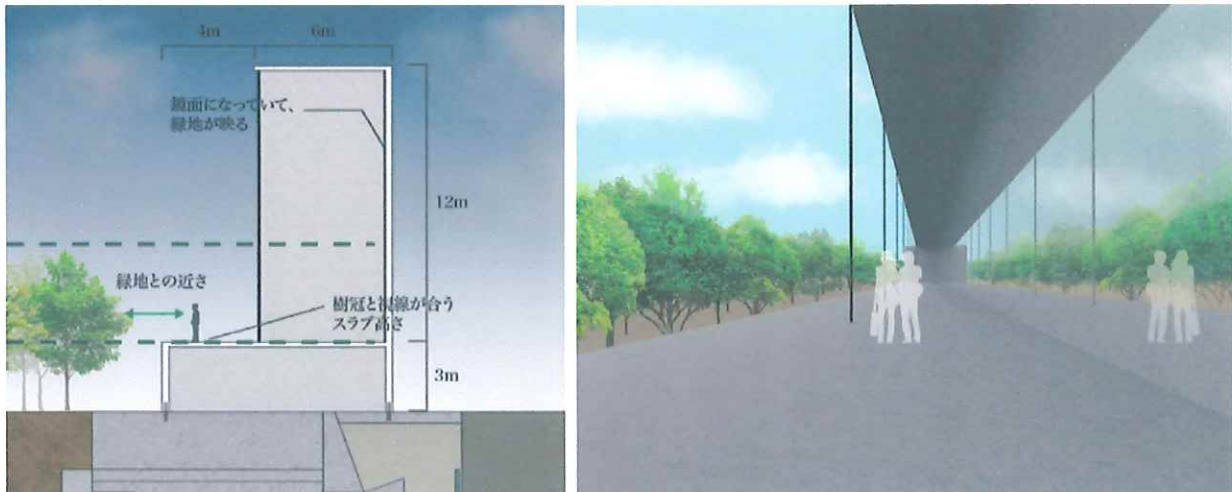
様々な形で削り取られた不規則な壁面のところどころがすりガラスとなっていて、両側の世界の色味だけが透けて入る。時間の経過とともに処分場跡地の自然が再生すれば、二つの世界の色味が近づいていき、緑化が進んでいくことが実感できる。

空間モデル 3



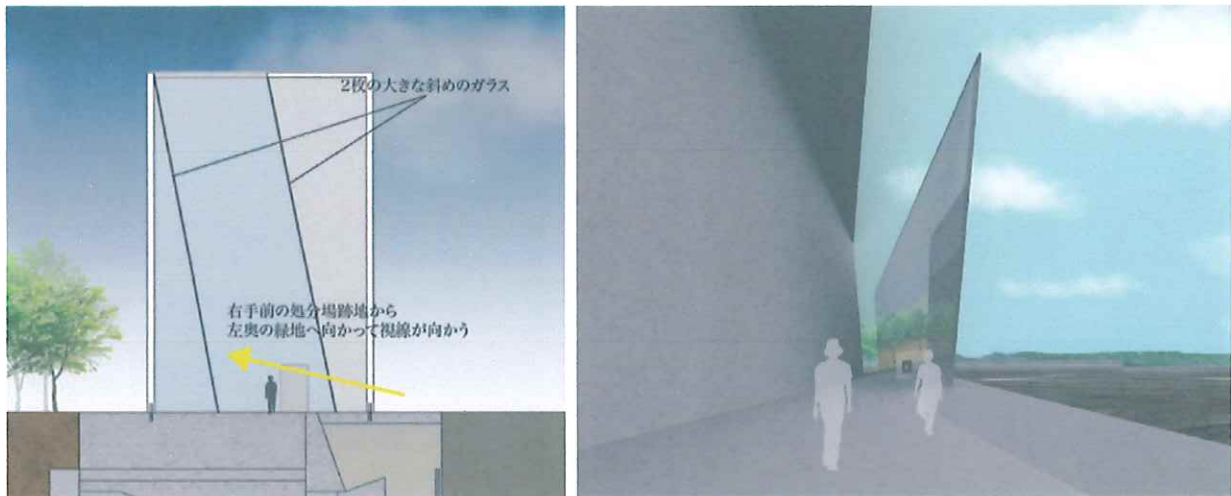
埋立後の土地を放置した場合、そこには長い年月をかけて、風や生物たちの働きにより、海上であることや廃棄物の埋立地であるという厳しい条件下でも生き残ることができる種類の植物が根付いていくと考えられる。そのような特殊な状況下での、人工的な緑地とは対照的な長いスパンでの植生の変化・自然再生を実験的に観察することができる。

空間モデル 4



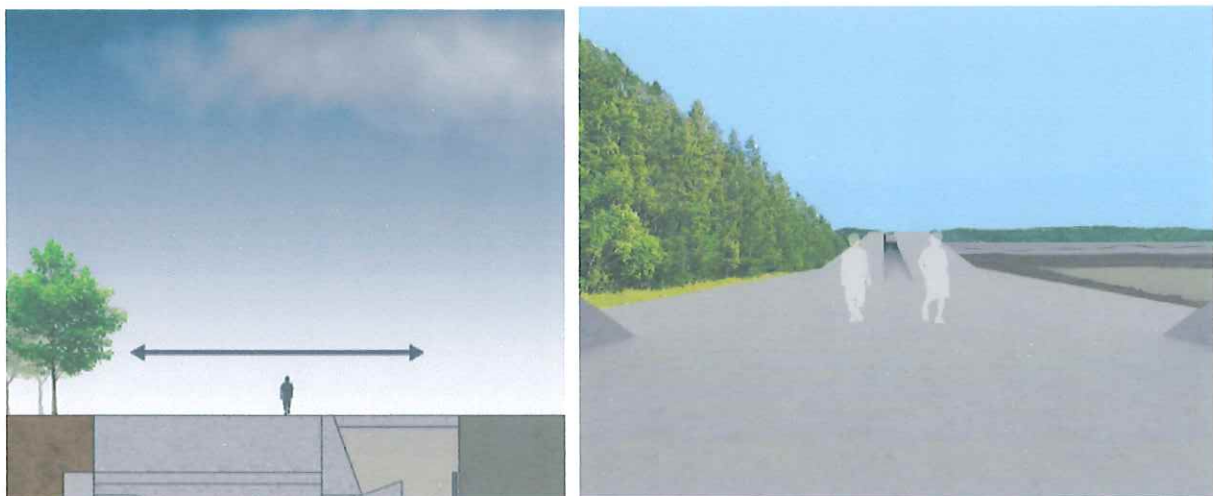
一般的な埋立地では、人工的に緑化が進められれば、比較的短い時間で、ある程度様々な樹種からなる心地よい緑地をうみだすことができる。ここでは、通路の高さを地面から 3m あげて視線を樹冠と同じ高さにし、廃棄物の埋立地側を鏡面にすることによって、「緑化」された環境を強調する。

空間モデル 5



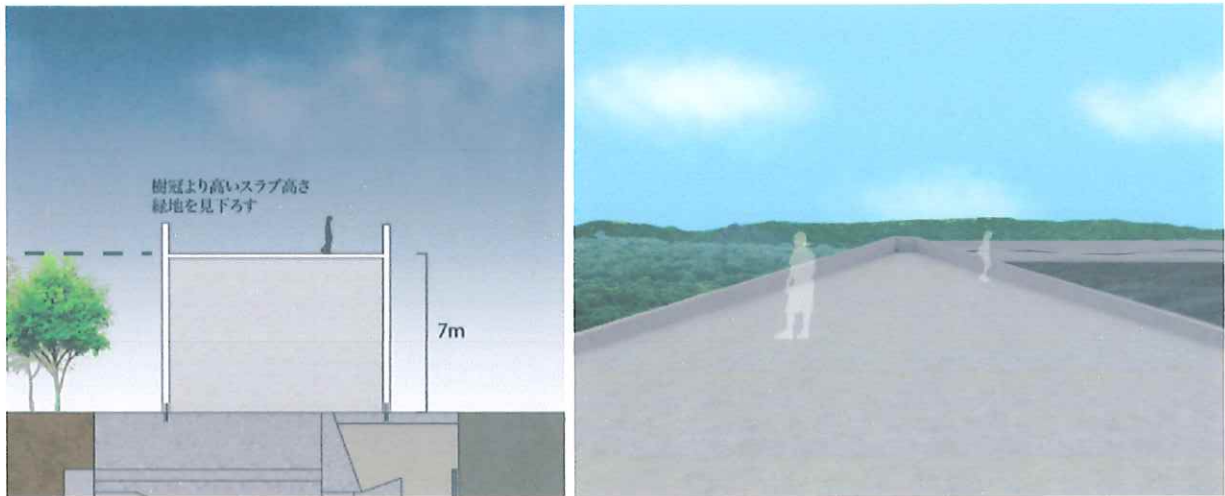
通路に斜めに大きな切れ込みを入れる。手前の処分場跡地から緑地側へ視線が抜け、将来的に処分場跡地が先に見える緑地のように緑化がすすんでいくことを暗に感じさせる。

空間モデル 6



ここまでの体験をふまえた上で、開けた場所に出て、両側の世界の違いを見る。人工的な緑地と、放置された場所に発生する自然の植生の規模や、そこに流れる時間のスケール感の違いなどをより鮮明に感じることができる。

空間モデル 7



地面からの高さ 7m の通路。樹冠よりも視点が低いここでは、人工的な緑地と処分場跡地に自然が根付いていく様子を俯瞰することができる。また目の前に広がる、それらとさらに対照的な、神戸の街並みや、人工的ではない本物の緑地としての六甲山も見渡すことができる。

模型写真



4. まとめ

土地造成事業による埋立地と、廃棄物の最終処分による埋立地、という異なる環境条件の埋立地が隣り合うというのは珍しい事例である。その跡地利用として、単純に緑地を創出するのではなく、そのような特殊な環境を活かして、人工的な緑地と、厳しい条件下での自然再生を対比していくというのは、神戸のこの場所でしかできないことである。そのインターフェースに空間モデルを挿入していくことにより、その環境の違いをより一層鮮明に体験できる場を設けることができる。そこは2つどちらの埋立地の跡地利用においても、緑化や自然再生の新しいモデルとなれる可能性をもち、高い価値のある場所となるだろう。